The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者の孤独感に及ぼす「孝」への期待と子どもからのサポートの影響 : 日本と香港の比較
Author(s)	黒川, 育代; 易, 家怡
Citation	生老病死の行動科学. 2009, 14, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

高齢者の孤独感に及ぼす「孝」への期待と子どもからのサポートの影響
－日本と香港の比較－

Effects of the expectation of filial duty and support from children on loneliness in the elderly：A comparison between Japan and Hong Kong

（大阪大学大学院人間科学研究科）黒　川　育　代
（大阪大学人間科学部）易　　家　怡

Abstract

The purpose of this study was to investigate how expectation of filial duty and a supportive relationship between elderly parents and their children affect loneliness in the elderly. We compared 92 Japanese elderly people and 51 elderly people living in Hong Kong. The results indicated the following: (1) Elderly people in Hong Kong are more conscious of filial duty than their Japanese counterparts. (2) Regarding the supportive relationship between parents and their children, there is no difference between Japan and Hong Kong. (3) Among people living in Hong Kong, in spite of their high expectation of filial duty, they receive less support from their children, and suffer more from loneliness.

Key word: loneliness, filial duty, supportive relationship

Ⅰ　背景と目的

近年、先進国では急速に高齢化が進行している。高齢社会の到来は、充実した余生を送る可能性を広げたが、どの文化圏においても、高齢者の自殺の全自殺に占める割合が極めて高いのが一般的である（高橋，2008）。日本においても高齢者の自殺は中年に次いで多く、深刻な社会問題のひとつとして考えられている（本橋・金子，2008）。こうした高齢者の自殺動機のひとつとして、孤独感が挙げられている（本橋・金子，2008）。近年の核家族化などの家族関係の変化や地域コミュニティの希薄化に伴い、孤独感を抱く高齢者が増加している。また、高齢者の自殺率に関して、高齢者とその家族の観点から検討した下仲 (2004) は、一人暮らしよりも家族と同居している高齢者の自殺率が高いことを指摘し､自殺の原因として「家族の中で取り残された高齢者の存在」を述べている。ここでいう孤独感とは、他人との交流や接触を感じられない主観的状況から生じる、不快で苦しいネガティブな感情であり（落合，1999）、周囲の人の有無に関わらず、孤独感は生じるのである。

高齢者の孤独感に関する研究はこれまで多くなされてきており、高齢者の孤独感には、生活満足度なども有意に関連することが報告されているが（青木，2001）、特に、他者との関係が大きく影響していることが報告されている（長谷川・岡村・安藤・児玉・古谷野，1994；林・劉・展・李，2008）。高齢者を取り巻く人間関係の中で、最も身近なサポート源は家族である。多くの社会において、サポート提供という面での家族の果たす役割は大きく (Ng, Phillips, & Lee, 2002)、重要他者である子どもとの関係が孤独感に及ぼす影響は大きい。そこで本研

究では、家族のなかでも子どもに注目し、高齢の親とその子どもとの関係を、親が子どもに対して抱くサポートへの期待と実際に受けているサポート量とで捉える。

アジア太平洋地域の社会では、「子どもには親の面倒をみる義務がある」という教えが、根強く存在する (Ng et al., 2002)。また、中国や日本を含む、東アジア各国に二千年以上影響を与え続けている儒教思想の中で、忠、仁、義などと並ぶ重要な概念として、「孝」がある。日本には「親孝行」という言葉があり、「“子どもにとって親は恩のある存在”であり、親孝行とは親に報いる態度である（深谷, 1995)」と考えられ、恩返しという意味が大きい。一方、中国においても、「報親恩（親に対する恩返し)」という言葉は使われているが、日本とは異なり、敬愛や親の欲求を充足させることを孝の中心であると考えており、孝の捉え方には文化差がみられる。そこで本研究では、日本と香港の高齢者を対象とし、高齢の親とその子どもとのサポート関係を比較検討するために、この「孝」という概念に着目する。

また、孝の捉え方に加え、日本と香港とでは、高齢者を取り巻く状況が異なっている。現在、日本の社会保障制度はよく整備されており、多くの高齢者がそれを頼りに生活している。厚生労働省の平成 20 年国民生活基礎調査では、公的年金・恩給を受給している高齢者世帯のうち、「公的年金・恩給の総所得に占める割合が 100% の世帯」は 61.2% であることが報告されている。一方、香港では、公共部門や NGO から得られる、高齢者への公的なサポートは非常に限られている (Ng et al., 2002)。実際、高齢者の生活保障は、高齢補助金や総合社会保障援助計画によってなされているが金額は決して多くなく、政府は家族内で高齢者をサポートすることを奨励している (Ng et al., 2002)。その結果、子どもに対して抱く孝への期待が、日本と香港とで異なっていると考えられる。そこで、本研究では、日本と香港に住む高齢者に注目し、高齢の親の孤独感を、成人した子どもとの関係性（孝）の視点から考察し、比較検討することを目的とする。

本研究では「孝」を、高齢の親に対する子どもからのサポートと定義する。浦(1992)はサポートの種類として、道具的、情緒的 2 つのサポートを抽出し、さらに道具的サポートを資源提供と情報提供、情緒的サポートを情緒的側面と認知的側面の 2 つに分けている。本研究では、資源提供を道具的サポート、情報提供は情報的サポート、情緒的・認知的側面のサポートを合わせて情緒的サポートとし、これらのサポートを「孝」として定義する。

Ⅱ　仮説

高齢の親が子どもに対して抱く、孝への期待が高いにもかかわらず、サポートを受けられていない高齢者の孤独感は高いと考える。一方、子どもからのサポートを受けられていないが、孝への期待が低い高齢者の孤独感は高くならないと考える。また、この傾向は、子どもとの同居率や子どもへの依存度が高く、子どもに対して抱く孝への期待が高いと考えられる香港で、より顕著にみられるのではないかと考える。

Ⅲ　方法

1. 調査手続きおよび調査対象

日本では、子どものいる 60－81 歳の男女 94 名を対象に、2008 年 10 月および 11 月に質問紙を配布した。対象者は、老人クラブの会員及び生涯学習センターの受講者であり、事前に各施設の職員を通じてそれぞれの会員に調査協力を打診し、協力の許可を得たうえで、調査

を実施した。香港では、子どものいる 60－87 歳の男女 51 名を対象に、2008 年 11 月に質問紙を配布した。対象者は、香港の公営住宅団地内の居住者であり、調査期間中に公営住宅団地内で調査対象者を探し、調査の目的および個人情報の取り扱いについて説明し、調査協力への承諾を得たうえで、質問紙への回答を求めた。日本での有効回収数は 92 名（男性 53 名, 女性 39 名；平均年齢 69.0 ± 4.6)、有効回答率は 98% であった。一方、香港での有効回収数は 51 名（男性 25 名, 女性 26 名；平均年齢 66.1 ± 7.4)、有効回答率は 100% であった。

2. 調査内容

2-1. 基本属性

年齢、性別、家族類型、主観的健康状況、主観的経済状況について、回答を求めた。主観的健康状況は、「1：全く不安はない」～「4：非常に不安である」の 4 件法で回答を求めた。また、主観的経済状況は、「1：非常に不安である」～「4：生活するには十分である」の 4 件法で回答を求めた。

2-2. 孝への期待

王･申･佟･費 (2003) が作成した「高齢者の親孝行への期待に関する質問紙」で、朴 (2008) によって日本語に翻訳された 9 項目で構成される尺度を用いた。各項目に対し、対象者には「1：全くそう思わない」～「5：とてもそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

2-3. 孤独感

Russell, Peplau & Cutrona（1980）が開発した孤独感尺度（UCLA 尺度）で、工藤・西川（1983）によって信頼性・妥当性を検討され、日本語に翻訳された尺度を用いた。各項目に対し、対象者には「0：全く感じない」～「4：いつも感じる」の 4 件法で回答を求めた。UCLA 孤独感尺度は 1 因子から構成されており、全項目の得点を単純加算し、「孤独得点」として分析を行った。なお、「孤独得点」の幅は 20 ～ 80 点である。

2-4. 子どもから受けるサポート頻度

対象者が子どもからどれほどサポートを受けているかを測るために、浦（1992）のサポート概念に基づいて、道具的サポート、情報的サポート、情緒的サポートについて各 2 項目、計 6 項目の質問を作成した (Table1)。各項目に対し、その頻度を、対象者には「1：そのような機会はない」～「5：いつも」の 5 件法での回答を求めた。

Ⅳ. 結果

1. 対象者の基本属性

基本属性について、本調査の日本人対象者と香港人対象者で比較するため、年齢に

Table 1　サポートの測定項目

	タイプ	提供方向	項　目　内　容
1	情緒	子 → 親	あなたに心配事や悩みがあるとき、子どもさんは相談相手になってくれますか
2	情緒	子 → 親	子どもさんは、あなたに電話をくれたり、訪問してくれますか
3	道具	子 → 親	あなたが急にお金が必要なとき、子どもさんはお金を貸してくれますか
4	道具	子 → 親	あなたが病期で看病が必要なとき、子どもさんは助けてくれますか
5	情報	子 → 親	あなたが新しい道具の使い方がわからない時、子どもさんは助けてくれますか
6	情報	子 → 親	子どもさんは何か困ったとき、あなたに昔のことや考え方を聞かれますか

Table 2　国別基本属性

	日本 N=92	香港 N=51	
年齢	69.0 (4.6)	66.1 (7.4)	**
家族類型			**
一人暮らし	6 (6.5)	5 (9.8)	
夫婦二人	44 (47.8)	9 (17.6)	
核家族	28 (30.4)	26 (51.0)	
三世代家族	12 (13.0)	6 (11.8)	
その他	2 (2.2)	5 (9.8)	

カッコ内は％

1) 平均年齢はｔ検定、家族類型は χ^2 検定による有意差を検定した。
$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, *n.s.* : not significant

おいてはｔ検定を、その他の項目では χ^2 検定を行った (Table2)。結果、年齢、家族類型、主観的経済状況について有意差が見られた。年齢は日本のほうが香港よりも有意に高かった (t (71.90)=2.55, $p < .05$)。家族類型においては、χ^2 検定の結果、有意差があり（χ^2=12.33, p < .01)、残差分析の結果、日本では夫婦二人暮らしが有意に多く、核家族が有意に少なかった。一方、香港では夫婦二人暮らしが有意に多く、核家族が有意に多かった。また、主観的経済状況については、χ^2 検定の結果、有意差があり（χ^2=11.40, p < .05)、残差分析の結果、日本においては「生活するには十分である」と回答した人が有意に多く、「まあ十分である」と回答した人が有意に少なかった。一方、香港においては、「生活するには十分である」と回答した人が有意に少なく、「まあ十分である」と回答した人が有意に多かった。

2. 孝への期待

2-1. 因子分析

尺度の安定性を確認するため、全データ（日本人･香港人対象者含）で因子分析（最尤法, プロマックス回転）を行った結果、初期解における固有値の減衰状況（第Ⅰ因子から第Ⅲ因子まで, 6.11, .59, .55）から、1 因子が妥当であると判断した (Table3)。α 係数は .94 であり､1 因子としての安定性が確認されたので､以降の分析では 9 項目の総合得点を「孝への期待」として分析に用いた。得点幅は 9 ～ 45 点であった。

なお、日本人対象者、香港人対象者の得点の平均値はそれぞれ、27.23 (SD=6.97)、37.60 (SD=7.78) であり、ｔ検定の結果、香港人対象者は日本人対象者より、子どもに対して抱く孝への期待が高いことが明らかになった (t (141)=8.18, $p < .01$)。

2-2. 国・家族類型と孝への期待との関係

孝への期待と、国・家族類型との関連を検討するために、年齢、性別、主観的健康状況、主観的経済状況を共変量として投入し、国 (2) × 家族類型 (4) の 2 要因の共分散分析をおこなった (Figure1)。結果、国の主効果が 5% 水準で有意 (F (1,129)=36.65, p<.05)、交互作用は 10% 水準で有意であったが (F (4,129)=2.16, p <.10)、家族類型の主効果は有意ではなかった (F (4,129)=1.74, *n.s.*)。交互作用が有意であったので、単純主効果の検定をおこなった

Table 3　孝への期待に関する因子分析結果（最尤法）

	項　目	因子負荷量
α =.94		
7	親の介護が必要になったとき、成人した子どもは親を扶養する責任を感じるものである	.86
2	成人した子どもは、出来るだけ親の近くに住み、親の生活に気を配るものである	.86
9	成人した子どもは、親を扶養する責任を感じるものである	.85
1	親は子どもを生み育てたのだから、子どもは年をとった親を扶養するのはもっともである	.84
3	成人した子どもは、頻繁に親を訪問したり、電話や手紙などで連絡をとるものである	.83
4	成人した子どもは、親の健康状態を気にかけるものである	.76
5	成人した子どもは、頻繁に親とのコミュニケーションをとるものである	.76
6	成人した子どもは、親が困っている時はできるだけ援助するものである	.74
8	必要な時に、子どもは親のために自分のことを犠牲にするものである	.68
	累積寄与率（%）	64.05

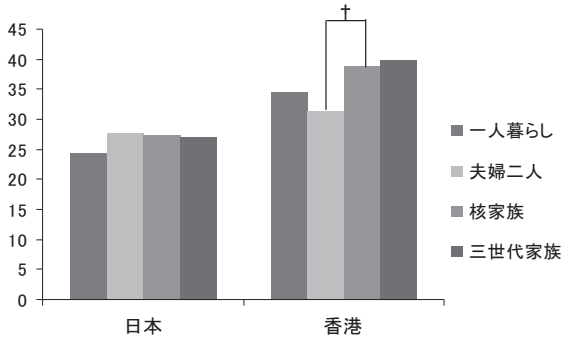

Figure 1　家族類型・国別の孝への期待得点

(Bonferroni 法)。検定の結果、香港人対象者では、家族類型が核家族の方が夫婦二人暮らしよりも、孝への期待が高いことが示唆された。

3. 高齢の親が子どもから受けているサポート

3-1. 因子分析

高齢の親が受けているサポートについて想定していた 3 つの概念が区別されるかどうかを確認するために、因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果、初期解における固有値の減衰状況（第Ⅰ因子から第Ⅲ因子まで，3.01, .89, .61）から、1 因子が妥当であると判断し、3 つの概念を区別することはできなかった（α 係数＝ .78)。

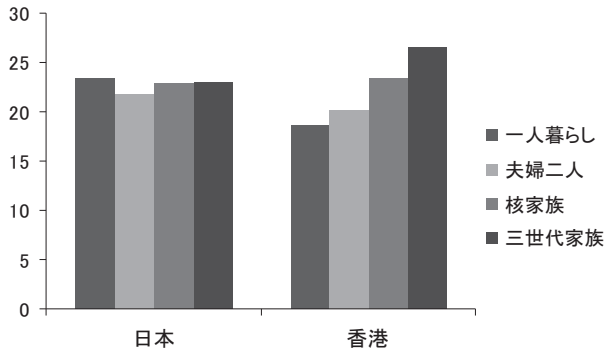

Figure 2　家族類型・国別の受サポート得点

そこで、本研究においてはサポートの種類を区別せず、その総量として後続の分析を行うこととし、6 項目の得点を単純加算し、「受サポート得点」として用いた。なお、日本人対象者、香港人対象者の得点の平均値はそれぞれ、22.35 (SD=5.74)、22.67 (SD=5.13) であり、t 検定の結果、差はみられなかった (t (141)=.33, *n.s.*)。

3-2. 子どもから受けるサポートと国・家族類型との関係

受サポート得点と、国・家族類型との関連を検討するために、年齢、性別、主観的健康状況、主観的経済状況を共変量として投入し、国 (2) × 家族類型 (4) の 2 要因の共分散分析をおこなった (Figure2)。結果、国と家族類型の主効果（それぞれ F (1,129)=.07, *n.s.*；F (1,129)=.97, *n.s.*）、交互作用ともに有意ではなかった (F (4,129)=1.06, *n.s.*)。

4. 孤独得点に及ぼす孝への期待とサポート関係の検討

孝への期待得点の上位 25%、下位 25%の対象者をそれぞれ「孝期待高群」「孝期待低群」と設定した。香港人対象者では、孝期待高群は得点が 43 ～ 45 点の 13 名、孝期待低群は得点が 14 ～ 35 点の 13 名であった。日本人対象者では、孝期待高群は得点が 32 ～ 45 点の 27 名、孝期待低群は得点が 12 ～ 22 点の 25 名であった。受サポート得点に関しては、平均点よりも高い対象者を「受サポート高群」、低い対象者を「受サポート低群」と設定した。国別で、孝への期待 (2) × 受サポート (2) の 2 要因分散分析をおこなった (Figure3)。

結果、香港では孝への期待と受サポートの主効果（それぞれ F (1,22)=7.57, $p < .05$；F(1,22)=5.63, $p < .05$）、交互作用ともに 5%水準で有意となった（F (1,22)=4.71, $p < .05$）。交互作用が有意であったので、単純主効果の検定をおこなった（Bonferroni 法）。検定の結果、孝期待高群において、受サポート低群は受サポート高群に比べて、有意に孤独得点が高いことが明らかになった。一方、日本では、主効果、交互作用ともに有意ではなかった（それぞれ F (1,48)=.36, *n.s.*；F (1,48)=.18, *n.s.*；F (1,48)=.06, *n.s.*）。

V　考察

1. 高齢の親が子どもに抱く、孝への期待

高齢の親が子どもから受けているサポート量に有意差はないが (t (141)=.33, *n.s.*)、香港の方が、日本よりも子どもに対して抱く孝への期待が高かった (t (141)=8.18, $p < .01$)。

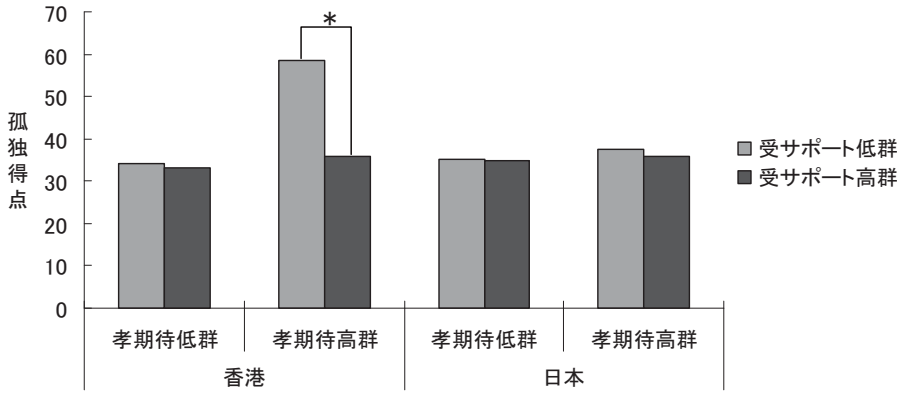

Figure 3　受サポート・孝への期待類型別にみた国別の孤独得点

以下より、日本と香港とで、孝への期待に差がみられることについて、考察する。

近年、先進国では急速に高齢化が進行しており、日本・香港ともに、高齢化率が今後さらに上昇していくことが予測されている点は、共通している。しかしながら、高齢者が生活を送るうえでの子どもへの依存状況は異なっており、日本とは対照的に、香港では高齢者への生活保障制度が十分ではなく、子どもが親を扶養することに対して責任を負っている。そのため、日本と香港とで比較した場合、香港の高齢者の方が孝への期待が高く、すなわち子どもからサポートを受けることに対して期待が高いと考えられる。一方、日本では、社会保障制度がある程度充実していることによって、高齢の親が子どもに対して抱く、孝への期待は低いと考えられる。

また、核家族化などの家族関係の変化による影響も考えられる。本研究の結果からも、香港では夫婦ふたり暮らしよりも、核家族や三世代家族といった子どもと同居している高齢者は、孝への期待がより高いことが明らかになった。一方、日本では、家族類型による孝への期待への差異はみられなかった。日本の平成 20 年度版高齢社会白書（2008）、香港の 2006 年中間人口調査主題別報告書－高齢者（2008）のデータを比較すると、香港の高齢者は子どもとの同居率が 53.5% と高く、過半数を占める一方で、日本の高齢者は一人暮らしあるいは夫婦ふたり暮らしの占める割合がそれぞれ 15.7%、36.5% であり、子どもとの同居率は 43.9% と、香港に比べて、低い値を示している。

以上のことから、香港では生活保障制度が十分ではなく、高齢の親は子どもと同居している割合が高いため、子どもに対して抱く孝への期待が高くなると考えられる。一方、日本では、生活保障制度がある程度充実しており、高齢の親は子どもと離れて生活している割合が高いため、子どもに対して抱く孝への期待は香港に比べて低いと考えられる。

2. 孝への期待と子どもから受けるサポートが、高齢者の孤独感に及ぼす影響

孝への期待が高い香港では、期待が高いにも関わらず、実際には子どもからの支援が十分には受けられていない親の孤独感が高いことが明らかになり、仮説が一部支持された。以下、高齢の親が子どもに対して抱く孝への期待と実際に受けるサポートが、孤独感に及ぼす影響について、考察する。

本研究では、日本においては孤独感と、孝への期待および子どもから受けるサポートとの関連性は認められなかったが、香港においては、孝への期待が高いにもかかわらず、子どもからのサポートを受けられていない人は、孤独感が高くなることが確認された。このことより、孝との関係で高齢者の孤独感を考える場合、孝への期待が大きい文化においては、実際に子どもから得られているサポート量が、高齢の親が抱く孤独感に影響を及ぼしていることが示唆される。

高齢者を取り巻く人間関係の中で最も身近なサポート源は家族であり、高齢者の孤独感には他者との関係が大きく影響することが報告されているにもかかわらず（長谷川ら, 1994;林ら, 2008)、なぜ、香港と日本においては、異なる現象が確認されたのか。これは、高齢者を取り巻く社会保障と家族関係が関係していると考えられる。下仲 (2004) が高齢者の自殺の原因として「家族の中で取り残された高齢者の存在」をあげているように、高齢の親に対する子どもからのサポートが不十分であることは、その親の孤独感につながると考えられる。先述したが、香港では日本と比べて高齢者の生活保障制度は不十分であり、子どもと同居している高齢の親が多く、子どもが親をサポートしている場合が多い。そのため、孝への期待が高いにもかかわらず、子どもからのサポートを十分に受けられていない高齢の親は、周囲の高齢者と比較して、家族のなかで取り残されているように感じやすく、孤独感が高くなるのではないかと考えられる。

一方、日本では、社会保障制度が充実し、多くの高齢者は子どもに頼ることなく過ごすことができるため、日本の高齢の親の孤独感に対しては、子どもに抱く孝への期待と実際子どもから得ているサポートとのズレによる影響がみられないのではないかと考えられる。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究で使用した孝尺度はあくまでも中国で作成された尺度であり、日本の孝意識として標準化されたものではないため、今後、孝尺度は再度検討する必要がある。また、本研究では、香港と日本とでサンプリングが同等ではなく、文化比較を行うには問題はあるが、子ども対して抱く孝への期待と実際に受けているサポートの乖離によって、高齢者の孤独感が高まる可能性を示唆できたのではないかと考えられる。

今後の研究において、日本人にとっての孝の概念を調査することが必要である。

Ⅵ　引用文献

青木邦男　2001　在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因；地方都市の調査研究から．社会福祉科学，**42** (1), 125-136.

Census and Statistics Department, Hong Kong (China). 2008
2006 Population By-census －Thematic Report: Older Persons－（2006 年中間人口調査主題別報告書－高齢者）. Census and Statistics Department, Hong Kong (China).

深谷昌志　1995　親孝行の終焉．黎明書房

長谷川万希子・岡村清子・安藤孝敏・児玉好信・古谷野亘　1994　在宅老人における孤独感の関連要因．老年社会科学，**16** (1)，46-51.

工藤力・西川正行　1983　孤独感に関する研究（Ⅰ）－孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討－.

実験社会心理学研究，**22** (2)，99-108.
林明鮮･劉永策･展光祚･李賢淑　2008　城市“空巣”老人与孤独感研究．社会工作社会調査，**3** (2)，43-46.
本橋豊・金子善博　2008　高齢者自殺の文化的側面　老年精神医学雑誌，**19** (2),176 － 182.
内閣府編　2008　高齢社会白書（平成 20 年版）
Ng,A.C.Y., Phillips,D.R., & Lee,W.K. 2002 Persistence and challenges to filial piety and informal support of older persons in a modern Chinese society: A case study in Tuen Mun, Hong Kong. *Journal of Aging Studies*. **16**, 135-153.
落合良行　1999　孤独な心－淋しい孤独感から明るい孤独感へ－．サイエンス社.
Russell,D., Peplau,L.A., & Cutrona,C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale : Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality Assessment*, **42**, 290-294.
下仲順子　2004　臨床心理学的地域援助　老人と家族の病理　氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中編康裕　心理臨床大辞典　培風館　pp.1250-1251.
高橋祥友　2008　高齢者の自殺の精神医学的側面．老年精神医学雑誌，**19** (2), 162-168.
浦光博　1992　支えあう人と人－ソーシャル・サポートの社会心理学－．サイエンス社
王大華･申継亮･佟雁･費広洪　2003　老年人孝順期待与親子間的社会支持．心理科学，**26** (3)，400-402.